ビブリア No. 31
福島高専 図書館報
発行 いわき市平上荒川字長尾30 福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和53年10月4日

一年生

水ぎわまでは 導かれた若者たち

読書傾向調査

読書習慣のための試み

——文庫解説目録と一年生——

国語科 池田 豊

1. まえがき——ここに至るまで

「多くの，すぐれた本を，深く」読ませることは，教師にとって強い願いである。それは，授業に直結する，または専門科目に関係する本だけに限らない。

残念ながら，まともな本を落着いて読みふけるのに向かない今の世の流れ，そして割合忙しい本校学生の実状は認めるとして，いや，それだけに，教える者としては，何とかこの願いを達成する方法を見出したい，そして学生各自に成果を収めさせたい。

そのために，ここ四年間，予備調査めいたこと，試行的なことを，国語科授業の関連でやり，このビブリアへも結果の一端を紹介してきた。

今回の試みはそのつながりとしてのものなので，手短にそれぞれのデータをふり返ってみると，

(1) 昭和49年，1年生冬休み 自由図書
①一冊も読まず——10％ ②興味本位，暇つぶしの動機が主 ③努力して読み通す傾向乏しい

(2) 昭和51年，2年生夏休み 自由読書
一冊も読まず——18％にも達した

(3) 昭和52年，3年生冬休み 岩波新書に限った
①気楽に読める物を選ぶ ②一方で社会科学系殊に心理学的な物に関心が強い

(4) 昭和52年，1年生夏休み 自由読書
①一冊も読まず——6％ ②推理物やSF（特に獄門島ブーム）に集中した ③外国長編小説が殊に乏しい ④要するに混沌未分化の域

(5) 昭和52年，4年生夏休み 自由読書
①一冊も読まず——13％も ②理工系に集約されて来た ③文芸物も分野が広がらない ④要するに先細りの段階

以上の経験から帰納して，昨今の本校生の傾向は，

(1) とかく安直な，または実用的な本で間にあわせたがる。

(2) 若い魂をゆさぶられ，人格を変革されるような読書の喜びに恵まれない。

(3) 各分野にわたって一流の本の顔ぶれを紹介され，承知する機会を持たない。

2. 今回の試み ——わくをはめた

従って，次に打つ手としては，

(1) 読書案内（つまり必読書目(リスト)を示し，解説を加える）をしてやる

(2) 義務感を与える——つまり課題とし，読後感を求めることによって習慣化を促す

ことを試みた次第であった。

手頃なガイドとして，主な文庫本の解説目録を有効に利用させることを考え，まず「古今東西にわたっていやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書」をのみ収めたと自称する岩波文庫から出発した。対象は当時の1年生約160名，期間は最も時間に恵まれる春休みとした。

岩波本店に要請して「岩波文庫解説目録」160冊を寄贈され，各人に与えた。さらに，その千種類を越す中で高校生向けの，「若い人々のために，責任をもっておすすめできる」と銘打たれた六十種の典籍に限定し，読後の感想文を予定しつつ選び，読ませることにした。すなわち，

岩波文庫ジュニア60選（53年1月，岩波書店選定）

竹取物語・徒然草・芭蕉俳句集・こぶとり爺さん，かちかち山・阿部一族・こころ・千曲川のスケッチ・にごりえ，たけくらべ・小僧の神様・白秋詩集・河童・風の又三郎・蟹工船，一九二八三一五・富嶽百景，走れメロス・蘭学事始・学問のすゝめ 余は如何にして基督信徒となりし乎・貧乏物語・青年と学問・ブッダのことば・論語・実践論矛盾論・阿Q正伝，狂人日記 イソップ寓話集・オイディプス王・ユートピア・ヴェニスの商人・アルプス登攀記・フランクリン自伝・不思議な少年・歌の本・車輪の下・変身・守銭奴・赤と黒・谷間のゆり・女の一生・にんじん・ベートーヴェンの生涯・狭き門・大尉の娘・父と子・貧しき人々・幼年時代・桜の園・どん底・絵のない絵本・ソクテラスの弁明，クリトン・エミール・死に至る病・眠られぬ夜のために・創世記・古代への情熱・ロダンの言葉・ロウソクの科学・人権宣言集・コモンセンス・ミル自伝・空想より科学へ・世界をゆるがした十日間

3. ふたを開けたら

(1) 選ばれた顔振れ

この，文芸・哲学・社会科学・自然科学に広がる名作の中からただ一冊を取り上げた1年生（現2年生）の好みを，頻度の高い順に示せば，

1 変身（カフカ）	22	6 走れメロス（太宰）	8	7 絵のない絵本（アンデルセン）	5		
2 車輪の下（ヘッセ）	18	7 蟹工船（小林）	5	12 どん底（ゴーリキ）	4		
3 こころ（漱石）	17	7 千曲川のスケッチ（藤村）	5	13 阿部一族（鷗外）	3		
4 河童（芥川）	15	7 狭き門（ジィド）	5	13 幼年時代（トルストイ）	3		
5 風の又三郎（賢治）	9	7 女の一生（モーパッサン）	5	13 小僧の神様（直哉）	3		

阿Q正伝・にんじん・赤と黒・古代への情熱・ロウソクの科学・桜の園・オイディプス王（以上各2）
高瀬舟・友情・富嶽百景・守銭奴・罪と罰・父と子
貧しき人々・断食芸人・ユートピア・実践論
（以上各1）

つまり，与えられた六十種から，三十三種がとりあげられたわけで，自然科学系が一つ，人文科学系が三つのほか，殆ど近代文芸物で占められている。

筆者が甚だ意外に思ったのは，その頻度の傾き，殊に上位四つの集中ぶりであった。

(2) 決めたわけと，あとくち

一年生の段階にしては不思議と思われるこの著しいかたよりについて，その選択の動機や読後の印象などを追跡してみる必要を感じ，5月，アンケート式調査をしたのが次のデータである。上位四つだけのものを紹介するならば，

A. 選んだ理由・動機

	全数	1 自分の問題に関係がある	2 人にすすめられた	3 有名な作品なので	4 題名に引かれた	5 作者を知っていた	6 手ごろの長さ	7 その他
変身	22	2	3	、	12	、	9	4
車輪の下	18	6	2	11	2	1	1	2
こころ	17	5	、	6	7	1	1	1
河童	15	、	1	5	7	2	5	3

（注）(1)一人二項目までとした。

(2)「7. その他」＝家にあった，本屋にあった，表紙に引かれた，マンガで見たことがある など。

B. 読後の印象・評価

	1 たいへん満足	2 だいたい満足	3 余りよくない	4 全くつまらない	評点 素点	評点 百分比
変身(22)	5	9	8	、	28	25

車輪の下(18)	10	8	、	、	74	82
こころ(17)	6	7	4	、	39	46
河童(15)	2	12	、	1	41	55

Aの選択肢は，自覚や主体性の度の順を考えたつもりである。

Bの選択肢に対して，仮に 1＝＋5，2＝＋3，3＝－3，4＝－5と換算して評価点を出し，百点法で比べてみたのが「評点」の数値である。

(3) なぜこうなったのだろう

上の二表をどう帰納すべきか。

①「変身」については，ひところの「ヘンシーン」遊びの後遺症も選択に作用してるらしく，果して身についた読みとりは不十分であったと見られる。満足度も最低である。

②「車輪の下」は，内容に予備知識を持って，進んで取り上げたと思われ，評価も上々でやはり「今の我が身につまされた」ことが察せられる。

③「こころ」は，有名作家の有名作というレッテルが有利にはたらいていたようで，主人公の抱いた深刻な問題をそしゃく消化するには，まだ力及ばぬ向きもある。背伸び的読書と判定される。

④「河童」は，その奇抜さに食指を動かした様であったが，読んだあとは，その鋭い諷刺には魅せられ，「今のこの世につまされた」思いが，わりあい高い評点を与えたものではあるまいか。

要するに，頭の中身も心のそれも千差万別の学生であるからには，いつ，どういうつもりで，どの本を読み，何を得るか，はもちろん千変万化であるのは当然のことで，時に甚しい背のびや無駄骨折りもある。従って，「読書指導」というものも，一般的手引き解説のあとには，個別指導が期待されることにもなる。

4. 読みっぷり

以下，この四作品について，若駒たちは，水をどのように自ら飲んだか，感想文例を紹介し，学生の反応のさまざまを具体的に見てもらうことにする。

(1) 変　身

工業化学科二年　石　沢　朝　香

「グレゴール・ザムザは，ある日毒虫と化した自分の姿を発見した。」

この本の頭は，このような文で始まる。―何故そうなったのか― この疑問を抱きながら読み進む。彼は昨日までの自分の姿を回想した。職業はセールスマンであった。そして毎日の通例の出来事が頭を駆け巡った。必ずしも幸福ではなかったが，不幸でもなかった。

変身後の彼は，決して取り乱さなかった。父母との会話でも，寝過ごしてしまって会社に行きそびれているかのように返答して，家族の者が彼の異変に気付くのを遅らせた。

その日から，家族とグレゴール（1匹の毒虫）との奇妙な生活が始まった。当然のことではあるが，彼は迫害された。両親などは，姿を見るのも敬遠したほどであった。俗に，片足を失ったり，両腕を切断したりしても，その人への愛情は変わらないというが，それは人間の形を止めているからであって，まるっきり異物に変形してしまったのであるから，家族のそういう気持ちはわかるような気がする。なんと人間らしい両親ではないか。

だが，妹のグレーテだけは非人間的であった。その虫けらに対して，一種の偽善者的な義務を感じ，世話をはじめた。それは愛情とよばれるようなものではなく，好奇心むきだしの少女のエゴであった。

一家の働き手を失ったザムザ家の生活は一変した。家庭にはたえず陰鬱な空気が流れていた。みな生きることに追われ，グレゴールのことなど微塵も顧みる日がなくなった。醜い姿に変ってからも家族を思いやり何かしてやりたいと考えていた健全なグレゴール・ザムザ。純粋な心をふみにじられた一匹の虫けら。苦悶の中で死は訪れた。「彼の頭は知らぬまにがっくりたれさがって，弱々しい臨終の息が鼻孔からかすかに流れ出た。」

私は，この小説はエキセントリックな，後味の悪いものであると思った。私が最初に抱いた疑問が少しも解決されていないからである。

不思議に私は彼に同情らしきものを感じなかった。それは，何故であろう。

疑問だらけの読後であったが，私には，核心にふれたものが一つだけあったような気がする。それは「生あるものとはみな〝無〟なのである」ということだ。グレゴールが死んだ後の家族の生き生きとした表情，晴ればれとした快楽。グレゴールが残した家を，今は

まっこうから否定して，よりよいものにしようとする冷酷な家族。人間の功績は美しく残せれば、こんな素晴らしいことはない。しかし，しょせん，無にかえってしまうものならば……。

今，私の心は，そんなすてばちな感情で，満ちている。

電気工学科二年　伊　藤　政　弘

ある朝，グレゴールという青年が目を覚ましてみると，自分が一匹の毒虫に変わっているのを発見する。その異様な姿は家族からさえ，見るのもいやな程きらわれて，父には，肉にめり込む程りんごをぶつけられたり，手伝い女から，いすをたたきつけられたりした。そのうえ，グレゴールを監禁しておいた部室は，やがてがらくたやごみを置いておく物置同然の部室になり，その部屋でグレゴールは感動と愛情とを持って家の人達のことを思い返し，静かに息を引き取ってゆく。そして彼の家族は，彼が死んでいるのを見つけると，「これで神様に感謝できる。」などと言い，今までのことなど忘れたように親子三人で郊外に出て，引っ越しなど将来の相談をしているところでこの物語は終る。

毒虫に変身するということだけでも苦痛なのに，それ以上の苦労をしたにもかかわらず最後には死んでしまう。しかも，彼をきらっていた家の人達のことを思い返しながら。いつかは元の人間にもどるだろうと思いながら読んでいったぼくにとって，これは意外な結末だった。そのうえ，この物語のどこにも，グレゴールに同情的なことばは出てこないのだ。グレゴールは家の人達のことを思いながら死んでいったのに，家の人は，彼が死ぬと，もう彼のことは忘れてしまったかのように，楽しそうに将来のことを話し合うとは，少しひど過ぎると思った。

最後まで読んでも作者の意図はわからなかったので，「あとがき」を読んでみると，第一次世界大戦とか，ドイツなどということばが出てきた。これらから，ナススのユダヤ人迫害と，この物語の作者カフカがユダヤ人であったことを思い出した。

毒虫に変身してしまったというだけで，家族からきらわれて死んでゆくグレゴールと，ユダヤ人であるというだけで罪もないのに殺された人々には，共通している所があると思う。ユダヤ人に生まれたくて生まれたわけでもないのに，ユダヤ人だというだけで殺されるとは，ユダヤ人でなくとも，怒りを感じると思う。まして，ユダヤ人迫害を体験したに違いない作者カフカにとって，怒りは甚だしいものであったと思う。それでカフカは，ユダヤ人を一匹の毒虫にたとえて，ユダヤ人迫害の批判をしたのだと思う。

そんなことを考えながら，もう一度この「変身」という物語を読み返してみると，やはり傑作といわれるだけのことはある作品だと思った。

機械工学科二年　武　田　倫　明

私がこの本を始めに手にした時，あの「変身ブーム」を思い出した。がしかし，身体が変化することには違いないが，私のもっていた生やさしい幼稚な変身ブームの考え方とはまるで違う，陰気，そしてぶきみな感じであった。

第一ページをめくった私は，主人公の悲劇に思わず驚嘆し，一瞬自分の体に視線をしみじみとはわせた。第一ページは「ある朝，グレゴール＝ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと，自分が寝床の中で一匹の巨大な毒虫に変わっているのを発見した。」という書き出しで始まっていた。

平凡な外交販売員だった彼は，外交販売員の仕事にうんざりしながらも毎日をすごしていた。それは，生きがいなど感じるわけのない，つまらないそしてつらい仕事であった。

店主からは，怒られそしてなじられながら，彼，グレゴールは仕事を続けていた。

そんな彼が虫になった時，私は，「グレゴールは救われたのではないか。」と思った。

しかし，人間でない彼の姿を見た家族が，彼を恐れた時には，意外な人間の冷たさを知らされた気がした。でも，家族との断絶だけはグレゴールにとって，無味乾燥の世界からぬけでるためのたった一つの試練のように私は感じた。

息のつまりそうな生活にじっと耐えて生きて行かねばならぬグレゴールにしてみれば，虫になった方が良かったのだ。私には，人間時代のグレゴールよりも，毒虫時代の彼の方がいくらかは自由に見えたのである。

食べる事を拒否して，飢え死にを選んだグレゴールは，もっと自由が欲しかったのではないだろうか。死は彼にとって自由への旅立ちであり運命でもあったのだろう。

生きがいの感じられない人生ほど味気のないものはないと思う。味気のない人生を感じる人は不幸である。人間として不幸な道を進んでいたグレゴールは，ある日巨大な毒虫になることで，醜い，そして味気のない人生から脱出をはかったのに違いない。

私には，グレゴールのなった「巨大な毒虫」とは，

人間の醜い社会からの脱出をはかる一つの手段に思われてしかたがなかった。

土木工学科二年　宗　像　　豪

僕はこの題を見て，内容はきっとＳＦ物かスリラー物だと予想していたけれど，最初のページを読んでみると，異様な雰囲気を持つ文章になんとなく圧倒された。そして，読んでいるうちに，どんどん出てくるグロテスクな表現に，なんとなく心地好さの感じられない興奮に包まれた。

しかし，最後まで読んでみて，いったい作者のカフカはこの物語を通じて，何を言おうとしたのだろうか，という大きな疑問が残った。結局，僕がこの小説を読んでおもしろいと感じたのは，物事を巧みに表現した文章であって，ストーリーそのものは全く理解できなかったのである。何故カフカは主人公であるグレゴールという男を醜い巨大な毒虫としたのか。そしてその巨大な褐色の虫は何の象徴なのか。そして最後に主人公であるグレゴールが醜い姿のまま，とうとう人間にはもどれずに死んでしまうのはどういう意味を持っているのか。こういった疑問点が数えきれないほど出てくる。そしてその答えも僕には無数にあるような気がする。

そういったたくさんの不可解な問題がこの小説の中に無数に含まれていて，一度読んだぐらいでは作者の意図はおろか，ストーリーさえも完全には把握できなかった。どうにも後味が悪かったので，再び読んでみた。二度目は，一度目よりは余裕を持って読むことができたので，はっきりではないが，なんとなく前回よりはわかってきたが，言葉で表わすには至らなかった。

作者カフカは，主人公のグレゴールが毒虫に変わって死に至るまでの，異常なほど残酷な事件を，まるでごくありふれた日常会話でもしてるかのように冷酷なばかりに冷静な文で物語を進めている。僕は今までいろいろな小説を読んだことがあるが，このようなたぐいの物は初めてである。内容はよく理解できなかったが，なんとなく精神的に衝撃のようなものを受けたような感じがした。

考えてみると，僕はこの小説を読んで何を得ることができたか，自分でもわからない。何も得ることができなかったようにも思える。でも，これから何度か読みかえしてみると，きっとすばらしいことを得ることができるのではないかへ思う。読みがいのある小説である。もし時間的に余裕があれば，もう一度読んでみようと思う。

(2)　車 輪 の 下

機械工学科二年　原　　泰　志

僕がこの小説を読もうとしたきっかけは，一度これを読んだ友だちから聞いた内容が，あまりにも僕の現在の境遇と一致していたからだった。

主人公ハンス・ギーベンラートは，情操などまるでもたぬ，生まれつき融通のきかぬずるい商人である，ヨーゼフ・ギーベンラートを父にもつ。母はとっくに他界していた。

けれどもハンスは，厳粛で聡明で上品な少年であった。彼には疑いもなく天分があり，世界の外に目を放ち，働きかけていた。また，散歩やつりが好きという純真な自然児である。

ハンス少年は周囲の人々の期待にこたえようと勉強にうちこむ。この時の，何か不可解なものに対する不満やつらさは，僕も一年前に体験していてよくわかる。それもハンスは僕などの比ではない。毎日毎日，寝るひまもないはどである。勉強の苦しさ・つらさに卑屈になり，こんなことをして何になるのかなどと不満を持って，悩んだあげくに投げだしてしまいそうなものだけれども，むしろハンスは，知識をいろいろと得られることが楽しいかのように深夜おそくまで勉学に励む。翌朝，はれぼったい，くまのできた目で登校するほどに。そんな勉強熱心な真面目な少年だった。

いよいよ試験当日。試験は二日に渡り行われたが，不安のため彼は満足に解答できず，二日めにあの口頭試問があった。厳粛な先生たちの，品定めをするような視線をうけながら，いろいろと質問されたものならば，大抵の者は緊張し，頭がぼーっとするだろう。ハンス少年の場合も，自分でも何を答えたかも忘れて，もうどうでもいいと絶望的になり，頭をかかえて退場した。

けれども，ハンスは二番という好成績で合格していた。

それから，彼の神学校での寮生活が始まった。親元を離れて規則づくめの寮に入ることはどれほどつらいか，僕も現在，経験していることだ。それでこのハンスの気持ちはよく理解できる。彼はそこでハイルナーという悪友を持つ。彼は，勉強は一夜漬けで済むといった天才であり，それゆえに賢く，同級生ばかりでなく先生たちまでへこましてしまう。模範生のハンスと，不良と印のついたハイルナーが親友になったことは，まるで奇妙なことである。ハンスはその正直さゆえに堂々としたハイルナーにひかれたのかもしれない。けれども，ハンスはそのためにどんどん落ちこぼれていき，

いろいろな矛盾に反抗し，神経症になり，学校を離れる。そして，見習い工として出直そうとする。

彼はもうあの純真さを失っていた。夜遅くまで工場の仲間と，悪びれながらも平気で酒を飲み，泥酔し，女をからかっていた。

あの優秀な模範生であったハンスは一体どうしたのか。どうしてこんな結果に終わってしまったのか。彼は素直で正直であった。自然を愛し，自然とたわむれるのが好きな少年。彼は，少年らしくもっと健やかに育つ権利があったはずだ。人間らしい少年をこの世から奪ったのは一体だれなのか。車輪の下じきにしてしまったのは一体だれであったか。彼は生まれつき天分のある子どもだった。彼の将来は保証されていたようなものだった。だが，それだから，強制されて，無理をして，こうなったのではないか。

翌日，彼はそれまでの吐き気も，恥も悩みも取りはらわれ，穏やかな顔つきをして，静かな川の流れの中で冷たくなっていた。

電気工学科二年　大　越　　修

私がこの本を読むのは二度目である。近頃，読書冊数の著しく少ない私が，おもしろいと感じた唯一の本である。

古い小さい町の，平凡な一商人の子，ハンス・ギーベンラートが主人公である。

彼は，天分を持って生まれた少年である。この古い小さな町がかつて生んだことのない天才児である。彼の将来は，はっきり決まっていた。州の試験を受けて神学校に入り，さらに大学に進み，それから牧師か教師になるという，彼の周囲の人々の決めつけた一つの道，踏みはずすことのできない一本のレールである。

ハンスは，そんな周囲の引いたレールの，最初のトンネルである州試験を受けるために，好きな釣りも散歩も禁じられ，試験に挑み，二番という優れた成績で神学校への入学を許可された。

ここまで読んで，この少年の英雄物語で終わるのかと，期待を裏切られた気がした。しかし，ページ数はまだ半分も過ぎていず，有名な本なので，この後を期待しながら続けることにした。読み進む程，おもしろさを増していった。

神学校の入学では，私達が4月に本校へ入学し寮へ入ったのと同じ心境が，克明に書かれてある。私達のだれもが，経験したそのものであった。

ハンスは，「ヘラス」という名の部屋に九人の仲間と生活を共にすることになった。ここでの，9月から冬の休暇までの，わずか3，4カ月間が，ハンスの人生を変えてしまったことになる。この変貌ぶりには，当然加害者がいた。その名を，ヘルマン・ハイルナーという，これまた天才的詩人で風変わりで，同級生にも先生方にも嫌われる少年である。

最後の解説を読んでわかったことだが，この小説は作者のヘルマン・ヘッセの自伝であり，ハンスこそヘッセの若き頃の姿である。ヘッセは，知っての通り世界的詩人，作家であるが，この本によればヘッセの分身であるハイルナーは実在人ではなく，詩人になりたいやりきれない思いを表わすヘッセの分身であったのだ。

物語はその後，神学校から牧師へと定められた道を歩くことに反抗し堕落し，ついには学校を去ってしまう。そして，見習い工となり，ある日の出来事で命を自ら断って終わっている。ヘッセ自身はこの時には死なず，文学史上に名を残すことになる。

題名「車輪の下」にみるように，ヘッセは「教育の車輪」に押しつぶされた自分の不幸を世に訴えようとするのである。周囲の期待や規則づくめの生活は，彼を押しつぶしたのである。しかし，ハンスは負けたがヘッセは勝ったのである。彼の天分は，詩人としての彼に与えられたものだったのだ。

工業化学科二年　荒　　研　一

ハンスは死んだ。でもこれでよかったかもしれない。この本を読んでいって，この先，ハンスはどうなるのだろうかと思ったが，ハンスが冷たい肉体となって暗い河を流れていったというところに，何かこう自分の心にホッと救われるものを感じさせられた。秀才コースから挫折した彼には，もう，何も残っていなかったのだ。これから先，錠前屋をしてでも，世間から「これが秀才のなれの果てか」とバカにされ，ますますこの少年は，恥辱と苦悩の世界に追いやられただろうと思う。

思春期。肉体的・精神的にも不安定な少年たちにとって一番大切な時期に，先生や牧師たちが，野蛮な名誉心，自分たちの願望のために，彼の唯一の楽しみである「つり」まで取り上げてしまって，州試験に合格したあとの夏休みをすべて勉強に当てさせた。なぜ，「休み中は，ゆっくり伸び伸びとすごしなさい。」ぐらいの一言も言ってやれないのか？

ハンスが神経衰弱になり帰郷したとき，期待をうらぎられたと，先生や牧師たちは冷たかった。もし，ハ

ンスのためを思って勉強を教えてくれたのなら，なぐさめてやるのが当然であるはずなのに……。僕は彼らにちょっときつい言い方かもしれないがこう言ってやりたい。「おまえらは，ハンスを何と思っているんだ。彼はただ自分たちの野心を果たすための道具だったのか？」と……。

しかし，ハンスをあそこまで追いやったのは，彼らだけというのではない。エンマもそうだと思う。年上のエンマにとって彼は単なる遊び相手としか言えなかったと思うが，ハンスにとってこの淡い恋は，もし実っていれば，精神的に立ち上がるきっかけとなっていたかもしれないのだ。

しかし，僕は，実際この人たちだけを攻めてもしかたがない，問題はハンス自身にあったのではないかと思う。結論として，ハンスは性格的に純情で，繊細で美しい花のようであった。しかし，裏をかえせば思春期であったこともあって傷つきやすく，もろかった。人間とは結局は孤独で弱い。だが，最後に頼れるのはやはり自分しかいないのだから，人間，「美しいが弱々しい花」であるより，幾度踏まれてもそれに耐えられる「たくましい雑草」にならなければならないということ。そしてまた，人間はハンスのように悩みをうちあけられるような人がいないと，ひとりで苦しんでいくようになる。だから，悩みごとを心の底からうちあけられるような友人がいなければならないということも，この本を読んで強く感じさせられ，また，考えさせられた。

最後に，ハンスには母親というものがいなかった。この本には彼の母親について詳しく書かれてはいなかったが，なんらの愛情もあたえられなかったハンスにとって，もしも，ハンスの母親が生きていればその愛情で神経衰弱，そして死，などという運命はたどらずに将来，牧師か教師あたりにでもなって，この物語は成り立たなかったかもしれない。だから母親の存在というのは，子どもにとって絶対に必要であるということも感じさせられた。

機械工学科二年　志比奈　　忠

ハンスが，心の中にまだ自由を持っていたころ，彼はウサギを飼っていた。川岸で一人，釣りを楽しんだ。自然は彼にささやきかけたし，彼もそれを聞くことができた。夕暮れには「タカ」小路で，リーゼの話に聞きき入ることもできた。

ハンスが，自分の心の中をさまよい始めたとき，誰もそれを見ようとはしなかった。古典語の文法に興味を感じなくなり，聖書の中に言葉としてではない神の姿を見いだすようになったとき，周囲の人々は彼を必要のない人間だとしてしまった。

教育は，容器に物を詰め込むことにすぎない。容器がどうなろうとおかまいなしに。たくさん詰め込まれたものは優秀であって，牧師か先生の名をもらう。しかも牧師は，聖書の中にキリストを見いだすことはできず，先生は，そんな牧師か自分の後継ぎをつくろうとする。

本当に不思議なくらい昔の思い出は彼の心に鮮やかによみがえってくる。しかし今の彼に何ができるというのか。彼の容貌，いやそれ以上に彼の心は，もう幼少のころにもどれなくなってしまっていた。

彼をそうさせたものは何だったのか。単に，父親や先生たちの虚栄心だけではないような気がする。僕にはまだはっきりとわからない。それは，もっと大きなものかもしれないし，もしかしたら彼自身にあったのかもしれない。

死の瞬間，確かに彼の背中の重いわだちは取り除かれた。しかし，死でさえ彼の心は満たせなかったろう。ただ彼には夢を見ることができるだけだった。昔のようにウサギを飼ったり，釣りをしたりする夢を。

(3)　こ　こ　ろ

機械工学科二年　鈴　木　　修

私がこの本を読んだのは，確か四回目だと思う。最初は中学一年のとき，次が中学三年のときに二度読みそして今度で四回目だ。正直言って一度目や二度目に読んだ時は，漱石が何を言おうとしているのか理解できなかったし，殊に一度目のときなどは途中であきてしまって読んでいるのがいやになるくらいだった。

しかし，今度読んだときはこれがあのとき読んだ本かと思うほど内容も興味の持てるものだったし，漱石の言おうとしていることがわかるような気がした。なぜ四年前に読んだときにはあんなにつまらなかったのに，今読んでみてこのように興味を持ちながら読んでいけるのか。この四年間に自分が成長したのかなどと思いながら読み続けていった。

前置きはこの程度にして本文の内容に入りたいと思う。

この「こころ」という話は，「私」と「先生」と呼ばれる人物を中心にして展開し，後半部は「先生」の遺書を中心にし，人間のエゴイズムについて描いているように思われる。

私と「先生」との出会いは鎌倉の海水浴場である。「先生」はある一定の時刻に海に来て泳いでいくだけで，「私」はその時同じ行動をとるだけだった。「先生」と「私」は特別の会話も交さないし，「先生」は「私」に特別の感情を持っていたわけではない。それなのに「私」と「先生」とのつきあいは続いていく。私は，読み進んでいくうちに「先生」に暗い影のようなものがあることから，「先生」には人に言えないような過去があるのではないかと思った。それは当たっていた。「先生」は若い頃に叔父に裏切られ，しかもその自分が，今度は友人を裏切るという複雑な過去を持っていた。

私は，叔父に裏切られた「先生」の気持ちも友を裏切った「先生」の気持ちも，両方ともわかるたうな気がする。二つの相反する事が理解できる。一見，変に思えるようだが，人間とはこういうものではないのだろうか。このことを悩んだ「先生」は死を選んだが，このような二つの相反することをしている人は世の中には沢山いる，いや大部分なのではないだろうか。しかし「先生」は弱過ぎたのではないだろうか。どうして最後まで自分自身と戦わなかったのだろうか。今はこういう気持ちでいっぱいだ。それにしてもこの本の中の二つの相反することを理解できてなんとも思わない自分が恐ろしいし，悲しいように思える。

電気工学科二年　佐　竹　永　史

この小説は，「私」と「先生」の付き合いから始まります。「私」は，「先生」の思想を学びとろうとしますが，先生の「自分を信用できないから，他人も信じることができないのです。」という言葉に，先生の何か秘められた過去を知るのです。

僕は，この作品の中の「恋は罪悪ですよ。解っていますか。」と「先生」が「私」に何げなく言う場面を思い出します。先生は，人間の本質自体が罪深いとして毎日，懺悔のような生活を送るのです。なぜ，先生がただ何もしない生活を続けていたのか，僕には理解できません。先生は「罪」というものを知っていたのでしょうか。

「先生」の学生時代，下宿していたところに「お嬢さん」がいました。先生は，お嬢さんをしだいに意識しはじめるのですが，そのような時に，彼の友人のKを，いろいろないきさつで，自分の下宿に同居させることになったのです。そのうちKもお嬢さんを意識するようになり，とうとう先生にお嬢さんのことをうちあけてしまうのでした。先生は，しだいにあせりを感じ，お嬢さんに求婚してしまいます。Kは，その後自殺してしまいました。

Kは，いつでも自分にきびしく，たえず自分の精神的な向上を求めている人でした。しかし，「自分が恋をしているという敗北感」を一番強く感じて死んでしまったのでしょう。彼が友人である先生の裏切りを苦にしていたとは思えませんし，たとえそうであったとしてもKは男らしかったと思うのです。しかし，先生は，卑怯だったと思うのです。あげくの果てに自分も信じず，他人も信じないという先生，そして実生活では感情におぼれてしまっている先生に，矛盾を感じずにはいられませんでした。最後に先生は，同じようにKのあとを追っていってしまいました。僕は，先生が自分に悲観しているのが本当であるのか疑問です。先生が嘘をついていたというのではないのです。僕は，この本を読んで，人間というのは，自分の心が自分で分り得るのか，半信半疑になってしまいました。「自分が信じられないから他人も信じられないのだ」という言葉がひっかかって，頭が混乱してしまいます。Kにしても，先生にしてみても，彼らの考えていたこととは別に「人間らしかった」と思えるのです。

工業化学科二年　松　田　伯　志

僕は，今まで夏目漱石の本を読んだことがなかったので，まず初めに「三四郎」を読んでみた。やはり明治に書かれただけにわからない言葉も少しあったが，感想としては，たいへんおもしろかった。これは，大学生である三四郎が美弥子という女性を愛するが，結局，その恋は実らず，彼女は他の男と結婚してしまうという作品である。僕としては，じれったく，そして共感のもてるような感じだった。

それから次に読んだのが「こころ」だった。これは最初のうちあまりおもしろそうでなかった。というのは，前作にくらべとても暗い感じがしたからだった。しかし，だんだんと読んでいくと，中ほどからスリル的な魅力が感じられ，それからはこの本に釘づけとなってしまった。

そもそもこの作品は，鎌倉の海で「私」と「先生」と呼ばれる人が出会う所から始められていた。この場面は，僕に少し興味を与えたが，あまり特別なものはなかった。中盤までは「私」のことがいろいろと書かれてあり，後半になると「先生」と呼ばれている人の過去の出来事から現在の心境などがくわしく書かれている。つまり「私」という人の目から見た先生の生き方が，この物語の態型なのだろうと思った。ただし，

「先生」と呼ばれる人は，べつに学校の先生ではなく，私が勝手に先生と言っているのだそうだ。作中で私と称している書生は，なぜか先生の不思議な魅力にとりつかれているようである。それは先生の人生経験がそのようなものを発散させているためのようだ。

先生は若いころ親友を裏切って恋人を得たが，親友が自殺したために罪悪感に苦しんでいるということだった。現在の妻であるその恋人は，ほんとうの自殺の理由を知らないで今でも夫につくしている。他の人にもそのことは言わなかった。しかし，人間ぎらいになった先生の唯一の友人であるこの書生には，今になって本当の事を手紙に書き，そして「自殺する」とも書いた。

私と初めて会ってから，暗い罪悪感を持ったがゆえに自殺しようと決意するまでを描いたこの作品は，明治の人の孤独な内面を表わしたように思えた。親友が自殺したことによる罪の意識は，先生の頭の中から消えるものではないけれど，自殺をしなくてもよいだろうと考えるのは，明治と昭和の時代の歪みのせいなのだろうか。

とにかくこの作品はとても深みがあり，僕が，この本に心を打たれたことは事実であるけれども，作品のたいせつな意義をまだほんの一握りしかわかっていないというのは，とても残念である。でも作品の最後の部分は，たいへん感動的であり，僕の心の中にいつまでも残ることだろう。そして，この作品は，底の底までよく掘り下げて何度も読みかえしてみるつもりだ。

(4) 河　童

工業化学科二年　草　野　正　彦

私がこの本を読んだわけは，まず一つは題名が特異なこと，それともう一つは，作者の文学には少なからず興味をもっていたことです。

これは，ある精神病院の患者が誰にでもしゃべる話です。

彼は，ふとしたことから河童の国にまよいこんでしまいました。彼は，そのまま河童の国に住むことになり，だんだんとそこの生活になれていき，医者のチャックや漁夫のバッグなど，友だちもできていきます。すると河童の生活になれていくにつれて，人間の社会に不信感さえいだくようになっていくのです。

河童の国というのは，作者の考えたユートピアに近いものだと思います。しかし，完全な理想郷ではありません。そこにも，戦争や刑法などがあるのです。

作者がこの小説の中で最も訴えようとしているのは河童の国という風俗，精神の，現実世界と全然ちがう異郷をとりあげることになって試みた，人間社会に対する批判，諷刺なのでしょう。出産，遺伝，家族制度，恋愛，検閲，政党，ジャーナリズム，新聞，戦争，芸術，法律，自殺，宗教，死後の問題など，河童の世界を借りて，作者自身にとって最も痛切な問題を大写しにしていると感じました。

たとえば，出産です。河童は母親がお産するとなると，父親は，はらの中の子供に大声で生まれて来るか，生まれて来ないかを尋ねるのです。しかも，はらの中の子供はそれに返事をするのです。河童に言わせればこうです。

「両親の都合ばかり考えているのは可笑しいですね。どうも余り手前勝手ですから。」

まったく我々の観念と全然標準を異にしてします。それでいて，河童の国の方がもっともだというような気もします。生まれる前から自己を尊重する。このことに，私は少なからず感激しました。

現在，我々をとり囲んでいる社会はめまぐるしく動き，動揺しています。我々は，いや少なくともこれを読んだ自分自身は，作者の訴えを自分なりに理解し，現実社会を冷静にみつめていきたいと思います。

最後にふと思ったことなんですが，序文に「出て行け，この悪党めが！　貴様も莫迦な嫉妬深い，わいせつな，図々しい，うぬ惚れきった，残酷な，虫の善い動物なんだろう。出て行け！　この悪党めが！」というところがあります。これは精神病者が河童の話を終えたときに，誰にでも怒鳴りつけることばです。これは，作者が人間そのものを批判したものではないでしょうか。そして同時に，作者の彼自身に対する自己嫌悪，苦しみを語っているように思いました。

電気工学科二年　星　　嘉　一

私は，河童という空想上の動物を通して，現代人の社会・政治・宗教などを見つめるという芥川龍之介の書き方に強く心をうたれました。

普通であれば，人間以外の動物から人間社会を見るなどということはあまりしないだろうし，まして現実に存在するかどうかわからない空想の河童などは，思いもつかないでしょう。

物語は，ある精神病患者の語った話で，患者が河童との出合いをきっかけにして数年間を河童の世界でくらし，いろいろなことを体験してくるというものです。

患者が語るには，河童のお産というものは，父親が

生まれてくる自分の子供に「おまえはこの世界に生まれてくるのか」と尋ね，子供が母胎の中で考えて，生まれてくるそうです。

このことが人間社会で起きたなら，現代のように「自分は何のために生きているのかわからない」とか「自分の将来に自信がなくなった」などといって自殺するようなことがなくなるのです。現に私も母胎の中で，生まれて来るか，来ないかを考えることができたなら，当時の社会状態を考えて，この世に生まれてきていなかったかもしれません。

印刷所では，機械の発達などによって出た失業者をすべて家庭の食料にして食べてしまうそうです。そうすると失業者が生活に困ることなく，他の河童が食品に困ることもなくなるといったような，一石二鳥のことが起こっているそうです。しかしこれは，河童の考えであって，人間にこのようなことを当てはめて考えたなら，失業者がなくなり，食料の心配がなくなるといった良いことばかりでないはずです。いかにして失業しないかといったみにくい争いが起こるはずです。これらのことが我々人間と河童の違いであり，人間社会がいかに複雑であるかがわかります。

河童は令嬢が運転手に惚れたり，令息が女中に惚れて結婚したりすることを，真の義勇隊と考え，人間社会では一本の鉄道を奪うために互いに殺し合うことが義勇隊である，と書いてありますが，これは，芥川龍之介が当時，日本が戦争をし相手国を自分の支配下にしたということを批判しているのであって，「河童」というこの本の中で私達に一番言いたかったことではないでしょうか。

最後に患者がこの話を終えると，誰にでもこう怒鳴りつけるのです「出て行け！　この悪党めが！　貴様もばかな，嫉妬深い，図々しい，うぬ惚れきった，残酷な，虫のいい，動物なんだろう，出て行け！　この悪党めが」本当に人間は，河童よりも劣っているのでしょうか。

土木工学科二年　黒　沢　洋　二

まず，この本を選んだ理由は「河童」という題名からしていかにもユーモアにあふれ，読んだ後「おもしろかったなあ。」と実感すると思ったからです。

しかし，心に残るものはあるにはあったんですが，予想に反してあんまりおもしろいものではありませんでした。

たしかに，ある精神病者が河童の世界へ行く，という発想は非常におもしろいと思ったんですが，転回が速過ぎて，こちらに息を与えてくれないのです。しかし，考えて見るとあれだけのページ数で，人間の社会政治，宗教，道徳，習慣，全般にわたって批判，諷刺しているのですから。

とりわけ，なるほどと思ったのは，多量に機械が新案され，従ってまた多量の余った職工たちが有無をいわさず，みんな殺されて，同じ河童に食べられてしまうというくだりです。これなんか，今もむかしも変わらない失業問題への痛切な批判だと思います。

そして，文章と文章との間に，何というか皮肉というか，訴えというか，何か異様な社会への告白というようなものが感じられました。多分，ぼくが思うには作者はそのころ社会に対して反抗の目を持っていたのだと思います。ところどころそんな感じがしました。

全体的にいって，河童というものの，個々の登場人物の出現によりユーモア，楽しさを引き出し，その反面，社会の諷刺・批判などによって，重くのしかかるような圧迫感が全体の異様な雰囲気として感じられました。

結局，本当にあんまりおもしろいものではありませんでしたが，社会諷刺のユーモアと全体の異様な狂ったような雰囲気に感動しました。もう少し時間がたった後で，実感としてわかってくるような小説だと思いました。

土木工学科二年　星　　博

この小説はある一人の狂人，二十三号という男が話したことを芥川龍之介が書きとった，という形式をとっているが，このころの彼の様子からみると，二十三号とは彼自身のことではなかったかと思える。この当時彼は，神経衰弱で発狂寸前の状態であったという。

本文からいくつか抜き出して考えてみると，この状態だからこそ書けたのだ，と思いあたるところがあった。その一つに河童の国の死刑の方法がある。本文そのままに書くと，

「日本にも死刑はありますか？」

「ありますとも，日本では絞罪です。」

「この国では絞罪などは用いません。まれには電気を用いることもあります。しかし大抵は電気も用いません。ただその犯罪の名を言って聞かせるだけです。」

というものである。さらにその河童は，

「わたしはこの間もある社会主義者に『貴様は盗人だ』と言われたために心臓麻痺をおこしかかったものです。」

ということをいっている。いかに河童という生き物の神経が細く鋭敏であるか。これを芥川龍之介におきか

えると，いかに彼が神経の細かい人であったか，ということがよくわかる。それからこの少しあとに次のような会話がある。ある一匹の河童が，

「おれは蛙かな？　蛙ではないかな？　と毎日考えているうちにとうとう死んでしまった。」

と。彼もこのように一人で悩み苦しみ，そしてとうとう自殺という最後のところまで追いこまれたのではないだろうか。僕にはそんな気がしてならないのだが。彼はこの小説をかき上げて5カ月後に自殺している。

以上のことについて，私達はいろいろ考えるところがあると思う。僕にはこのことがよく理解できる。なぜならば，僕だって一人で悩んだことがあるからである。さすがに決行とまではいたらなかったが，自殺しようとまで考えたことがある。おそらくこれは僕にかぎらず，ほとんどの人が一度は考えたことがあるのではないだろうか。しかし，人々はそれにたえうるだけの強い心と神経を持ちあわせているし，そういう時は助け合っていける仲間というものもある。ただ彼の場合，作家という職業がら，たえず一人ぼっちであった。彼はそういう生活にたえられなかったのではないか。本当に一人ぼっちというものはきびしくつらい。しかし，それにたえてこそ真の人間形成，真の人生をおくるということが出来るのではないだろうか。

(5)　その他の三例

なお，読まれた回数は上の四種より少ない本であるが，読書感想文として「これは」と思われる例を三つあげる。

①　風の又三郎

機械工学科二年　結　城　信　浩

初めに，物語の概略を話しておく。

ある田舎の谷川の岸にある学校に，三郎という少年が転校して来た。その時代には珍しく洋服や靴を身につけた髪の赤い少年であった。その地方では，風の神を「風の又三郎」と呼んでいた。少年の一風変わった行動に風がいつも伴うところから，村の子供達は三郎を「風の又三郎」と呼ぶ。村の子供達と三郎との幾日かが過ぎて，三郎はまた，よその学校へ行ってしまった。激しい雨が降る，風の強いある日の朝であった。

この物語のミソはなんと言っても（三郎＋転校生＋風の又三郎）のところにあるだろう。

僕自身，幾度となく転校したこともあるし又，転校生というものを迎えたこともある。

実際，転校生というものには，何かえたいの知れない不思議な印象がある。賢治は，子供達が抱く転校生への不思議な感情を，「風の又三郎」というものに実にうまく照合させている。

又，この物語のもう一つの読みどころとなるのは，子供達をとりまくところの自然描写である。賢治は，子供達の不思議な感情と同様，自然をも実に鋭く，繊細な感覚で巧みに表現している。そして巧みな方言の利用，これは，素朴で純真な子供達を表現するのに大きく役立っていることは確かであろう。

別れの挨拶もなしに去って行った三郎が，村の子供達に残していったものは何だったのか。この辺になってくると，僕には感想を述べることは，難しい。

最後の部分で，村の子供が，「やっぱりあいつは，風の又三郎だ。」と叫んでいる。

しかし，本当にそうであったかどうかは，はっきりさせられていない。実際には，「風の又三郎」の存在は空想的なものである。

が，どこからか，風と共にやって来て，風と共に去って行った少年三郎は，村の子供達にとってまさに風の神の化身「風の又三郎」そのものであったに違いない。

②　千曲川のスケッチ

工業化学科二年　松　野　　繁

「もっと自分を新鮮に，そして簡素にすることはないか。」　藤村はこのことを心に抱きながらこの山国へやって来たのだ。そして田舎教師として小諸義塾で，町の商人や旧士族，それから百姓の子弟を教えるかたわら，また反対に彼らからも学んだ。そしてなによりもここの自然を村の人たち以上に愛していたのだ。

藤村は自分を新鮮にしたかった。自分を簡素にしたかった。彼はこれらの願いをかなえるべく積極的にこの村の自然と風俗とに溶けこもうとした。そしてただひたすら自分の生活や村人たちの生活，そして自然をスケッチしつづけた。そしてなによりも，このスケッチは人に共感をあたえるものが多かった。それは，このスケッチを見ることによって私たち自身も，彼とこの自然での生活をともにすることができるからだ。そして彼は私たちをこの自然の中へと招くとともに，私たちの心をも新鮮にし簡素にさせるのだ。つまり彼はすでに求める願いをかなえつつありながら，その充実感を私たちにも分ってもらいたかったのであろう。「寂しく地方に住む人たちのためにも，この書がいくらかの慰めにならばとも思う。」と彼は述べている。

彼のスケッチの，心をひく点をいくつかあげてみよう。「かげは寒く，光はなつかしい。」日光はギラギラ輝いてまぶしいくらいなのだが，それでいて日かげへ寄ればやはり寒いという。ここの「なつかしさ」は夏のころのそれをなつかしませるような日の光ということだろう。夏から秋へかけての小春びよりをよく表わしている。過ぎ行こうとしている季節をなつかしむ。すばらしいことだ。

「浅間が焼けますナ。」　ここの山の美しさがこの一言に象徴されているようだ。「雪明かりで，暗いなかにも道はたどることができる。町へ通う人々の提灯の光が，夜の雪に映って，華やかに明るく見えるなぞもpicturesqueだ。」　絵画における省略法のごとく，白い雪と闇との強いコントラストとその中に点在する提灯の光とに，簡素でしかも豊かな美しさを彼は感じたのであろう。しかも彼は，提灯の光にあたたかさえ感じたかもしれない。

「あの羊の群れでも見るような，さまざまの形をした白い黄ばんだ雲が，あたかも春の先駆をするようにかすかな風に送られる。」　畑の上にひろがるさわやかな空は，雪の中の提灯とは対象的に自然のあたたかさを大いに感じさせてくれる。

そのほかにも，山の上の星のこと，暖かい雨の話，路傍の雑草など，どれをとってもみなすばらしい。どれもが彼の求めるものそのものであったのだろう。「すべてそれらのものが朝の光を帯びてわたしの目に映った時から，わたしはもう以前の自分ではないような気がした。」と彼は言っている。

千曲川は，常に彼の心へ新鮮なものを流しこんでいた。そして私たちは，このスケッチを通してその流れを受け継ぐことができるのである。

「自然は我々をsimpleにする。」

③ 女の一生

工業化学科二年　斎田裕子

これは，モーパッサンによって書かれたフランスの小説である。女主人公ジャンヌが人生に夢を抱きつづけるのだが，その夢が無残に砕かれていくというふうな内容である。

この本は今まで読んだどの本よりも，人生に対する孤独感・絶望感を強く私に与えた。

修道院での教育後，ジャンヌは，夫や息子に裏切られるのである。しかし，彼女はそのたびごとにくやしさや悲しさを味わいながらも彼らを信じたのである。私は，そんな彼女に同情よりはむしろ腹立たしさを感じた。彼女は夫に裏切られたとき，息子のポールに深い愛情を注いだ。しかし，これはきわめて自然なことであろう。彼女の愛情をまっすぐに受け入れることが出来るのは，まだ人をだますことを知らない小さなポールしかいなかったのだから。しかし，そのポールにさえも彼女は後にだまされるのである。このように深い愛情があっさりと裏切られるのかと思うと，私は人間に対する不安や絶望感を感じた。

ジャンヌは幸せだったのだろうか。いや，そんなはずはない。しかし，この本の最後のページの，彼女が小さな孫を抱いてうれしそうにしている場面を読むと，もしかしたら彼女は幸せだったのかもしれない，という気持ちにゆすぶられる。彼女は，自分の愛情を全てぶつけることの出来るものさえあればそれでよかったのかもしれない。くやしさや悲しさはどこにぶつけることもできず，結局耐えることになってしまったのだと思う。

自分の愛情が何かにあたってもはねかえってこないのでは，エネルギーを他のものに与えっぱなしで，与えたそれ自体はどこからも補給されないのと同じである。これでは，感情の栄養失調で死に至るか，人を信じられなくなるかのどちらかだろう。しかし，ジャンヌはその栄養失調に耐えたのである。これは，彼女が純粋であったがために出来たことだと思う。

私は，いつまでもだらだらと人を信じることには反対である。だが，ジャンヌが，人を信じて裏切られてそこから起こる困難な生活や弱い精神面から逃れず人生を送った偉大さは，否定できないと思う。

この作品を読んでいろいろなことを考えさせられたが，これを機会に，女性として，人間としての生き方考え方について私なりに考えてみたいと思う。

5. そえ書きと願い

以上，19編の作文を紹介したが，この年ごろの若者に関して読書経験というものが持つ殆どすべての型や意味が，自身の告白の形でここには現われている。

心ある人々にはいささかの資料となると思うし，本校低学年生諸君には大きな参考となると信じる。

なお，文章の解説目録を座右において，一流典籍に関する案内に役立たせたい試みは，今後，新潮文庫や角川文庫，その他についても予定している。

終わりに，重ねて学生諸君に強く望みたい，どうか「**多くの，すぐれた本を，深く**」読み進んで行ってほしいと。

(53.8.25)

（追　記）

長編小説と一年生

現代国語教科書で小説について学ばせたことに関連して，新潮社から「新潮文庫の100冊」というパンフレットを取りよせて渡した。

「青春時代の，本との貴重な出合いのために，新潮文庫1,400余冊のなかから，選んだものです」と謳われている。この中から，読みやすいと思われる長編小説だけ10種を指定して，夏休みの宿題とした。

読書回数（一人で二，三冊という者もいた）順に示すと，

	車輪の下（ヘッセ）	田舎教師（花袋）	路傍の石（有三）	塩狩峠（三浦綾子）	イワンデニソビチ（ソルジェニツィン）	青春の蹉跌（達三）	黒い雨（緑二）	雲の墓標（弘之）	赤と黒（スタンダル）	戦争と平和（トルストイ）
M	11	10	5	2	6	4	3	2	0	0
E	15	8	5	7	3	3	1	2	3	2
計	26	18	10	9	9	7	4	4	3	2

こゝでも「車輪の下」が群を抜いていることは興味が深い。次に，ヨーロッパ文芸には親しみが持たれていないこと，それだけに解説と奨励とが必要であることを思わせられる。更に，機械工学科と電気工学科との対比から，大胆な一，二の特徴が読み取れたそうである。

本校生低・高学年別の「必読・推薦書目録」とでもいうものを，自信をもって提示する日が望まれる。

（53.9.8）

昭和53年度　図書委員（教官および学生）

館長	芋川平一	（倫哲・独語）
副館長	松崎三重良	（電気工学科）
図書委員	池田豊	（国語）
〃	淡路英夫	（機械工学科）
〃	伊藤宏	（工業科学科）
〃	根岸嘉和	（土木工学科）
〃	渡辺毅	（事務部長）
〃	日下俊一	（庶務課長）
〃	加藤勇	（図書係長）

学科 / 学年	機械工学科 M	電気工学科 E	工業化学科 C	土木工学科 D
1	菊地和則 阿部尚彦	菊地稔 木村義昭	阿部信行	阿部光夫
2	村上秀夫	大和田修 大越修	内田修司	佐藤俊
3	雅楽川伸	新妻敏	馬上功	大森公
4	鈴木賢二	鈴木克俊	星野武志 松本正義	星光吉 佐藤忠明
5	鈴木栄一	高橋栄光	中野目慎一	佐藤保彦

昭和50～52年度（3カ年）学生利用状況

MDC分類 ＼ 利用冊数 / 年度	実数			%		
	50	51	52	50	51	52
000 総記	212冊	589冊	254冊	1.6	5.2	2.4
100 哲学	1,048	844	685	7.9	7.5	6.4
200 歴史・地理	260	165	148	2.0	1.5	1.4
300 社会科学	235	226	161	1.8	2.0	1.5
400 自然科学	2,902	2,808	2,960	21.9	24.9	28.0
500 工学・技術	6,707	5,399	5,431	50.6	47.8	51.0
600 産業	5	22	26	0.0	0.2	0.2
700 芸術・体育	160	118	79	1.2	1.0	0.7
800 語学	540	205	191	4.1	1.8	1.8
900 文学	1,186	924	710	8.9	8.1	6.6
合計	13,255	11,300	10,645	100	100	100

昭和52年度　利用人員（科・学年別）

科＼学年	1	2	3	4	5	計	%
機械工学科	182人	194人	563人	612人	1.322人	2,873人	29
電気工学科	189	580	515	553	1,205	3,042	31
工業化学科	283	784	675	582	369	2,693	28
土木工学科	95	229	423	141	277	1.165	12
計	749	1,787	2,176	1,888	3,173	9,773	100
%	7.7	18	22	19.3	33	100	

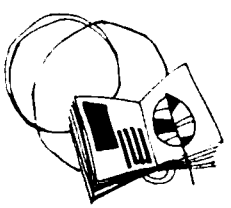
お　知　ら　せ

①　カセット編集デッキ　について

すでにカセットテープの高速転写器（コピア），それからカセットテレコ等，複写装置・聴取り装置が閲覧室に備え付けられ好評のうちに利用されているようですが，それに加え．今年度はデュアルカセット編集デッキ・ヘッドセット一式を購入しました。これは録音，再生メカ２台を内蔵しているのでダビングやミキシングなどテープの編集作業が簡単にできるようになりました。学習のために大いに役立たせて下さい。

②　ブックポスト　について

閲覧室入口にブックポストを設置しました。これは帯出図書の早期返却を促進するためのものですが，開館前と閉館後に利用して下さい。ポストに入れた図書は翌日必ずカードを受け取りに来て下さい。なお，うっかり手続きをしないで持出した図書もこれを利用して必ず返却するよう望みます。



新着図書目録

✣印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

東洋文庫
325　熱河日記 1　平凡社✣
326　日本風俗備考 1　同✣
327　管子譯 4　同✣
328　熱河日記 2　同✣
329　道教　同✣
300　日本史 5　同✣
331　カリーラとディムナ　同✣
332　憶柯堂棋話 1　同✣
333　甲子夜話 4　同✣
334　憶柯堂棋話 2　同✣
335　続語むや語まざるや　同✣
加藤英明
日本の良識をダメにした朝日新聞　山手書房✣
わたしの知的生産の技術　講談社✣
新訂中国古典選
7　外篇　荘子　朝日新聞社✣
8　内篇　同　同✣
朝日新聞縮刷版　昭和53年2月～6月　同✣
福島民報縮刷版　昭和53年2～4.6月　民報社✣
日本新聞年鑑　昭和53年版　電通
出版年鑑　1978　出版ニュース社✣
斉藤伊知郎
情報無限　昌平黌学園✣
武田泰淳
新聞をどう読むか　講談社✣
中村璋八 他
食経（中国古典新書）　明徳出版
漢詩大系
19　陸遊　集英社
22　清詩選　同
日本図書館学講座 2　雄山閣✣

哲　学

勝部真長
日本思想の分水嶺　勁草書房
高橋睦郎
地獄を読む　駸々堂
斉藤昭俊
日本仏教教育史研究　上代　中世　近世　図書刊行会
妻木直良
霊魂論　同
ガダマー
哲学　芸術　言語　未来社
佐々木一義
人間存在の倫理学　博文社
戸川行男
人間学的心理学　金子書房
カウルバッハ
イマヌエル カント　理想社
浜林正夫
魔女の社会史　未来社
小牧治　国家の近代化と哲学　御茶の水書房
堀田彰　ギリシャ社会の諸相とその価値観　法律文化社
戸頃重基
近代社会と日蓮主義　評論社✣
片岡弥吉
近世の地下信仰　同✣
藤井正雄
現代人の信仰構造　同✣
宮坂宥勝
釈尊　その行動と思想　同✣
金岡秀友
大乗仏教　同　同✣
松長有慶
密教の相承者　同　同✣
菅沼晃　ヒンドゥー教　その現象と思想　同✣
山折哲雄
ガンディーとネル　その断食と入獄　同✣
竹田晃　曹操　その行動と文学　同✣
金岡照光
敦煌の民衆　その生活と思想　同✣
市川安司
朱子　学問とその展開　同✣
阿部吉雄
李退溪　その行動と思想　同✣
石川米子
中国の革命　農民のたいかいの歴史　同✣
大室幹雄
説樓　古代中国の異人たち　同✣
世界の思想家
1　プラトン　平凡社✣
2　アリストテレス　同✣
3　アウグスティヌス　同✣
4　マキャヴェリ　同✣
5　ルター　同✣
11　カント　同✣
14　ダーウィン　同✣
15　キルケゴール　同✣
18　フロイト　同✣
21　ウェーバー　同✣
22　レーニン　同✣
24　ハイデッカー　同✣
日本仏教学会編
仏教における神秘思想　平楽寺書店
同　三昧思想　同
同　浄土思想　同
同　信の問題　同
同　行の問題　同
同　証の問題　同
荻生徂徠全集 2　河出書房新社
近代日本思想大系
8　徳富蘇峰集　筑摩書房✣
堀田彰　ギリシア社会の諸相とその価値観　法律文化社
印東太郎
心理測定　学習理論　森北出版
日本思想史講座
2　研究方法論　雄山閣✣
アジア仏教史中国編
Ⅱ　現代中国の諸宗教　佼成出版
陽明学大系
4　陸象山　明徳出版✣
7　陽明門下（下）　同✣
10　日本の陽明学（下）　同✣
12　陽明学便覧　同✣
Peter Milward
Religious Controuersies of the Elizabethan Age A Suruey of Printed Sources　Scolar

歴　史

西村駿二編
空中写真日本　朝倉書店
坂野正高 他
近代中国研究入門　東京大学出版会
谷岡武雄
聖徳太子の碑示石　学生社✣
樋口節夫
定期市　同✣
桑原公徳
地籍図　同✣
千田稔　埋れた港　同✣
竹岡林　丹波路　同✣
宮崎市定
中国史　上，下　岩波書店
尾崎秀樹
木曽路十一宿　駸々堂✣
L．フェルミ
ガリレオ伝　講談社✣
上原和　巡礼の白い道のうえに　朝日新聞社✣
日本古代人名辞典
1　あえ　吉川弘文館✣
2　おか　同✣
3　きさ　同✣
4　して　同✣
5　とひ　同✣
6　ふや　同✣
7　ゆわ　同✣
世界伝記大事典
1　あ～かつ　日本　朝鮮　中国編　ほるぷ出版✣
2　かと～さ　同　同✣
3　し～つ　同　同✣
4　て～ほう　同　同✣
5　ほく～わ　同　同✣
索引　同　同✣
世界をつくった人々伝記自叙伝の名著
総解説　自由国民社✣
古代学協会編
西洋古代史論集 1.2　東京大学出版協会
日本の山河
14　天と地の旅　図書刊行会✣
34　同　神奈川　同✣
日本庶民文化史料集成
3　能　三一書房✣
図説中国の歴史
8　清帝国の盛衰　講談社
藤岡謙二郎編
日本歴史地理総説　総論　先原史編　吉川弘文館
同　古代編　同
NHKブックス
316　森林の思考　砂漠の思考　日本放送出版協会✣
日本地誌
17　山口県　広島県　岡山県　二宮書店

社会科学

林竹二　教えるということ　国土社
学ぶということ　同
福島県警察本部編

明日への期待　阿部紙工
斉藤次男
風土社会革命論　地域科学研究会
江田絹子
津軽のおがさまたち　北方新社
クライナーヨーゼフ
南西諸島の神観念　未来社
W.N.スティーブンス
エディプス.コンプレックス　誠信書房
長村奉彦
生徒指導の法律常識　第一法規
村松博　人間はどこまでふえるか　講談社
宿澤富太郎
道徳教育原論　協同出版
森川久雄
授業のストラテジー　学事出版
朝日新聞社編
78　民力　都道府県別民力測定資料集　朝日新聞社
78　地域経済総覧　東洋経済新報社
問瀬正次
実践的道徳教育　明治図書
教育機器編集委員会編
産業教育機器システム便覧　日科技連
教育年鑑　昭和52年版　日本規格協会
教育学大事典
1　ア～カ　別冊索引　第一法規
2　キ～コウ　同
3　コク～ス　同
4　セ～ハ　同
5　ヒ～ワ　年表　同
6　資料索引　同
中村礼作
学年主任の実務　学事出版
日本都市年鑑　昭和52年　自治日報社
都市問題研究会編
都市問題研究　vol.1　No.1～6　1946　文生書院
同　vol.2　No.7～13　1950　同
同　vol.2-3　No.14～21　1951～1951　同
同　vol.3-4　No.22～30　1951～1952　同
同　vol.5　No.1～5　No.6～10　1953　同
同　vol.6　No.1～4　No.5～8　1954　同
シリーズ新しい教育機器
2　ビデオテープレコーダ　明治図書
世界教育史大系
32　技術教育史　講談社
40　世界教育史事典　同
全訳世界の地理教科書シリーズ
7　アメリカ　帝国書院
8　ブラジル　同
9　東ドイツ　同
10　ポーランド　同
11　インド　同
12　タイ　同
13　インドネシア　同
14　フィリピン　同
NHKブックス
314　オペレーションズリサーチ入門　日本放送出版協会
鹿（フィクロ T.3）　ジャパン.パブリッシャーズ
世界の女性史
19　目覚めゆく女性の哀歌　評論社
日本民族文化大系
2　折口信夫　講談社
3　渋澤敬三　同
5　喜田貞吉　同
6　柳宗悦　同
宮本又次著作集
6　風土と経済　同
Michael A Arbib
Computers and the Cybernetic Society　Academic Press
Peter K. Oppenheim
The Language of Interngtional Finance in English Moneyand Banking　Regents
English Education in Japan　Elec

自然科学

E.ワン　情報と動的システムの確率過程　産業図書
R.テマム
数値解析特論　同
数代勤　地学の語源をさぐる　東京図書
S.J.ラックマン
心理学と医学のあいだ　紀伊国屋書店
木村敏　自覚の精神病理　同
F.Smithies
自然科学者のための積分方程式論　講談社
人工衛生写真　リモートセンシング　朝倉書店
岩波理科学辞典　岩波書店
森口繁一
初等力学　培風館
岩波雲蔵
基礎力学演習流体力学　実教出版
川下研介
熱伝導論　生産技術センター
日本化学会
化学便覧　基礎編Ⅱ　応用編　丸善
飯内清　科学史概説　朝倉書店
V.D.バージャー
力学　培風館
電気磁気学演習　電気学会
南山哲郎
金属酸化物とその触媒作用　講談社
ウィルソン
科学研究の計画と進め方　技報堂
武谷三男
現代の理論的諸問題　岩波書店
小林桂助
原色日本鳥類図鑑　保育社
蒲原稔治
同　魚類　同
北村四郎
同　樹木図鑑　同
増山元三郎
少数例のまとめ方1.2　竹内書店新社
C.H.クームス
数理心理学序説　新曜社
科学技術論文報告書用英語文型文例辞典　日本科学技術英語研究会
科学技術和英表現中辞典　同
福岡義隆
環境と地学　森北出版
高瀬信忠
河川水文学　同
丸安隆和
日本の衛生写真　朝倉書店
火星探査衛生写真　同
三野与吉編
自然地理調査法　同
西村誠二
地図の利用法　同
湯川秀樹
創造への冒険　講談社
役部貞市郎編
問題解法代数学辞典 上.下　聖文社
栗田一良
からだで知る物理　講談社
飯田睦治郎
物理質問箱　同
西岡一　遺伝毒物　同
鈴村幸三郎
パズル数学入門　同
吉田昭作
科学技術に何ができるか　同
寺阪英孝
非ユークリッド幾何の世界　同
森田正人
原子核の世界　同
J.W.ランス
頭痛に強くなる　同
F.ゴールデン
なにが宇宙で起こっているか　同
亀松義造
疫学とはなにか　同
桜井邦明
太陽ニュートリノの謎　同
ガードナー
影の科学　同
宮下和喜
陸化動物の生態学　同
C.I.オパーリン
生命の起源への挑戦　同
R.H.マーチ
詩人のための物理学　同
気賀康夫
電卓に強くなる　同
浅間一男
植物の進化　同
加藤伸勝
酒飲みのための科学　同
都筑卓司
超常現象の科学　同
吉福康郎
やさしい力学教室　同
上平恒　水とはなにか　同
本間三郎
素粒子を光で見る　同
村山磐　日本の火山災害　同
高野義郎
物理学の再発見Ⅱ　同
松田卓也
進化する星と銀河　同
大沢文夫
偶性の生物学　同
力武常次
動物は地震を予知するか　同
川井直人
人類の現われた日　同
藤井清　物理現象を読む　同
高野一夫
「数」のおもちゃ箱　同
一松信　四色問題　同
香西洋樹
天体写真入門　同

寺阪英孝編
現代数学小事典　同　舎
E.H.コルバート
新版脊椎動物の進化 上・下　築地書館
田坂誠男
品質管理の基礎　朝倉書店
今井功　流体力学　前編　裳華房
森口繁一
数学公式 I・II　岩波書店
宮本健郎
核融合のためのプラズマ物理　同
上尾庄次郎
有機合成反応（下）　広川書店
Philip A. Horrigan
チャレンジオブケミストリー　同
地図の見方と使い方　日本測量協会
地図製図の手引　同
地図製図練習標準教材　同
鎌田秀男
建築技術者の数学　理工図書
塚本正文
技術者のための計算尺活用法　同
小川泉　地図編集および製図　山海堂
基礎数学ハンドブック　森北出版
谷村貴太郎
図表学綱領　丸善
奥尾泰俊
実験計画法入門　日本規格協会
生井武文
圧縮性流体の力学　理工学社
比良二郎
流体力学の基礎と演習　廣川書店
CBA化学（実験書付）　岩波書店

理科年表　昭和53年　丸善
吉田政幸
有機反応論入門　サイエンス社
数理解析とその周辺
12　分枝過程　産業図書
13　流れの安定性理論　同
14　確率過程の推定　同
15　数理物理の固有値問題　同
16　輸送方程式　同
17　フテファン問題　同
18　最適制御理論　同
19　非線形偏微分方程式　同
22　生物学における確率過程の理論　同

実験物理学講座
9　音響と振動　共立出版
アシモフ選集生物編
1　生物学小史　同
近代数学講座
13　函数解析　朝倉書店
水文学講座
11　河川水文学　共立出版
現代物理化学シリーズ
10　固体の化学　培風館
現代無機化学講座
4　固体の化学　技報堂
NHKブックス
319　氷河の科学　日本放送出版協会
物理工学実験
5　薄膜の基本技術　東京大学出版局
岩波講座基礎数学
18　環と加群 II　関数解析 1　複数解析 2
岩波書店
19　数論 I　確率論 II　Lie 群 I　同
新実験化学講座
14　有機化合物の合成と反応 1　丸善
笹部貞市郎
問題解法　微積分学辞典　聖文堂
Jagfeldt
Nursing　Ernst Klett Stuttgart
Hans J. Baues
Obstruction Theory
Springer-Verlag
Robin Hartshorne
Ample Subrarieties of Algebraic Varieties　同
John Wiley
Stochastic Processes　Wiley
Robin Hartshorne
Residues and Duality
Springer-Verlag
Eugene Isaacson
Analysis of Numerical Methods
John Wiley
I.S.Gradshteyn
Table of Integrals Series and Products　Academic Press
Rosalie Kerr
Nucleus Nursing Science Longman
Differentiable Manifolds
University of Chicago
Mathematical Tables　丸善

工学・技術

関門橋工事報告書　土木学会
カルフォルニア環境教書　地域科学研究会
山脇与平
技術論と技術教育　青木書店
奥村敏恵
土木設計製図　実務出版
山之内繁夫
要約と例解　土木応用力学　同
Alfredo H.S.
土木建築のための確率統計の基礎　丸善
コンクリート構造設計資料　技報堂
新防雪工事ハンドブック　森北出版
森重龍馬
基礎の選定と設計例　集文社
伊藤秀朗
地質工学の基礎　同
小野竹之助
鉄筋コンクリート構造設計　同
小谷昇 他
図解土木講座アスファルト混合物の知識
技報堂
岩松幸雄
橋台及び橋脚の設計と考え方　鹿島出版会
擁壁及びカルバートの設計と考え方　同
ケーソン基礎の設計と考え方　同
田中勇　コンピュータによる構造物の設計　鋼橋編
理工図書
大植英亮
同　土基礎編　同
大須田紀元
同　コンクリート編　同
現場のための土木工法ハンドブック 52年版
山海堂
第22回土質工学シンポジウム　昭和52年度
発表論文集　土質工学会
測量辞典　森北出版
吉沢孝和
測量実務必携　オーム社
高熊祐二郎
解析付測量士補問題回答500題　同
土木学会編
測量実習指導書　土木学会
D.J.シューリング
模型実験の理論と応用　技報堂
高岡宣善
工学のための応用不規則関数論　共立出版
Altredo H-S Ang
土木建築のための確率統計の基礎　丸善
中島重旗
技術レポートの書き方　朝倉書店
Y.C.ファン
連続体の力学入門　培風館
大橋義夫
材料力学　同
J.F.ノット
破壊力学の基礎　同
中沢一　固体の力学　養賢堂
小嶋為雄
応用土木振動学　森北出版
南日実　材料力学　現代工学社
佐藤常三
直交異方性体応用問題の新解析法　同
J.I.A.ガーリン
弾性接触論　同
小西一郎
構造動力学　丸善
成岡昌夫
構造力学要論　同
小西一郎
大学課程　土木構造力学　オーム社
G.N.スミス
有限要素法による応用解析入門
ブレイン図書
尾谷勝　確率論手法による振動解析　鹿島出版
土木学会編
構造物の安全性信頼性　土木学会
高岡宣善
構造部材のねじり解析　共立出版
土木学会編
土木工学における数値解析　サイエンス社
山口柏樹
土質力学（講義と演習）　鹿島出版
土質工学会編
土と構造物の動的相互作用　土質工学会
三笠正人
軟弱粘土の圧密　鹿島出版
E.イザクソン
トンネル技術者のための岩盤力学入門
同
R.H.ギャラガー
最適構造設計　培風館
小嶋為雄
鋼構造設計理論　森北出版
倉西茂　鋼構造　技報堂
E.B.Haugen
信頼性を考える材料力学設計　学献社
エゴーロフ
強さとかたち　東京図書
竹内洋一郎
わかる弾性学　日新出版
尾花英朗

熱交換器設計ハンドブック　工学図書
山崎徳也
構造解析の基礎　共立出版
千葉忠二
基準点測量の諸問題　山海堂
続　同　同
スクライブ法地図製図技術者必携
日本測量協会
塩口昇　実用基準点測量　同
斉藤晃夫
基準点測量の実際　オーム社
中川徳郎
測量士補受験100講　山海堂
製図のかき方　土木学会
R.J.フィーブス
技術の歴史　岩波書店
会田俊夫
歯車の技術史　開発社
会田軍太夫
科学技術概論　電気大出版局
B.ゴールド
電子計算機による信号処理　共立出版
宮川洋　不規則信号論と動特性推定　コロナ社
池森亀鶴
機械工学実験　産業図書
堀川明　ランダム変動の解析　共立出版
沖島喜八
全問解答機械力学演習　槙書店
島内剛一
システムプログラムの実際　サイエンス社
荒井康夫
セラミックスの材料化学　大日本図書
小石真純
粉体の表面化学　日刊工業
柳田博明
電子材料セラミックス　技報堂
原口好郎
港湾　空港施工法　上・下　山海堂
JISハンドブック鉄鋼　日本規格協会
小西一郎
鋼橋　基礎編Ⅱ　丸善
Ray W Clough
構造物の動的解析　科学技術出版社
土木学会編
土木技術フィルムリスト 1974　土木学会
マトリックス法とコンピュータ有限要素法
による構造解析プログラム　培風館
三好俊郎
有限要素法　実教出版
土木学会編
鋼構造要設設計指針　土木学会
岡崎清　セラミック誘電体工学　学献社
本間仁　新版流量計算法　工学図書
桜田一郎
繊維の化学　三共出版
汚泥の緑農地還元肥料化対策資料集
フジテクノシステム
海外研究開発レポート（河川後出降雨流出
のシュミレーション．モデルによる解析）
材料技術資料センター
早坂壽雄
音響振動論　丸善
橋本義一
統計的自動制御理論　コロナ社
最新トランジスタ規格表 '78　CQ出版
最新ダイオード規格表 '78　同
防振ゴム　現代工学社

琵琶湖疏水図誌　東洋文化社
現代弾性力学　オーム社
佐藤泰夫編
FORTRAN文法とプログラミング
学会出版
津雲孝世
建設機械の運用管理　山海堂
解説河川管理施設等構造令　同
IC応用ハンドブック　昭晃堂
村上喜一
工学英語　森北出版
武藤三郎
FORTRANと数値計算法　培風館
日本鋼構造協会編
コンピュータによる構造工学講座 1−1
同
兼杉博　測量公式活用ポケットブック　オーム社
西村蕨二
図説写真測量　朝倉書店
石原藤次郎
新版測量学　応用編　丸善
米谷栄二
同　一般編　同
進藤忠三郎
初級測量学　基礎編　活用編　理工図書
安田寿明
マイコンピュータ入門　講談社
マイコンピュータをつくる　同
渡辺茂　あすの技術へのヒント　同
本間琢也
エネルギーをつかむ　同
佐賀亦男
飛行機の再発見　同
樋口健治
自動車の科学　同
徳丸仁　電波技術への招待　同
依田浩　品質管理入門　同
日本音響学会編
騒音振動　上　コロナ社
三輪修三
回転機械のつりあわせ　同
OPアンプ規格表 1 '78　CQ出版
中川憲治
工業振動学　森北出版
横道英雄
コンクリート橋　技報堂出版
倉西正嗣
弾性学　現代工学社
土木学会編
構造物の安定性信頼性　土木学会
成岡昌夫
ニューマークの数値計算法　技報堂出版
鋼構造塑性設計指針　日本建築学会
日本測量協会編
測量計算錄表　日本測量協会
昭和53年版　測量士　測量士補　国家試験
受験テキスト　同
同　問題総合解説集　同
機械技術資料　誠文堂新光社
日本材料学会編
金属材料強度試験便覧　養賢堂
転がり軸受の選び方使い方　日本規格協会
杉田稔　機械材料の使い方選び方　日刊工業新聞社
米津栄　機械工学概説　森北出版
機械図集ブレーキ　日本機械学会
日本コンクリート工学協会編

コンクリート便覧　技報堂
H.リュッシュ
コンクリート構造物のクリープと乾燥収縮
鹿島出版
骨材の採取と生産　技報堂出版
福田武雄
鉄筋コンクリート理論　生産技術センター
H.シュトラウブ
建設技術史　鹿島出版会
飯吉精一
土木建設往然草　技報堂出版
S.P.ティモシェンコ
材料力学史　鹿島出版会
岡田清　土木材料学　国民科学社
田治米鏡二
土木技術者のための弾性波による地盤調査
法　槙書店
泉満明　鉄骨鉄筋コンクリート土木構造物の設計
オーム社
川本眺万
地盤工学における有限要素解析　培風館
土質工学会編
岩の工学的性質と設計施工への応用
土質工学会
久保田敬一
透水　設計へのアプローチ　鹿島出版会
武田通治
測量学概論　山海堂
千葉忠二
測量のための実用数学　同
同　最小2乗法　同
土橋忠則
基準点測量　同
藤藤種一
地形測量　同
中川徳郎
応用測量　同
雅邦彦　写真測量　同
種原毅　測量の基礎　同
改訂建設省河川砂防技術基準（案）調査編
計画編　同
金児武　測量実習　同
公共測量作業規程記載要領　日本測量協会
土木学会編
土木工学における数値解析　サイエンス社
中川徳郎
図解測量技術　現代理工学出版
同　応用測量　同
建設省道路局編
道路統計年報 1978年版
全国道路利用者会議
門屋卓　紙の科学　中外産業調査会
三輪周蔵
河川工法　常磐書房
加納威吉
渡渓船　内務省土木局
山内喜之助
樋門閘門　常磐書房
河川工法附図　同
岡崎文吉
治水　丸善
廣井勇　築港　前編　後編　同
田邊朋郎
改訂公式土師必携　同
弘山尚直
水力発電　岩波書店
内田一郎

道路工学　森北出版
山下修弐
浚渫及び掘鑿機械全　機械評論社
鶴見一之
土木施工法　丸善
志水直彦
土木工事用器具機械隧道工学（高等土木工学7）　常磐書房
竹下春見
路床路盤施工法　山海堂
宮本武之輔
改訂混凝土及鉄筋混凝土　上巻　工人社
廣瀬孝六郎
上水下水衛生学　南江堂
岡本舜三
地震力を考えた構造物設計法　オーム社
小林泰　コンクリートダム施工法　山海堂
塚本正文
モーメント分配法によるラーメン実用解法　理工図書
河野輝夫
建築及び特殊構造　アルス
菊地英彦
発電水力学　同
宮本武之輔
材料及施工　同
黒田静夫
河海構造物　同
志関秀雄
井筒ケーソンの設計　オーム社
木村公道
ＰＣ橋の設計　同
柴山富夫
最新工学宝典　理工図書
関信雄　測量学（高等土木工学3）　常磐書房
中村龍雄
土木技術者のための電子計算機の活用　日刊工業新聞社
三浦七郎
橋梁工学（高等土木工学9）　常磐書房
佐藤利泰
軌道工学（同　11）　同
山里尚行
発電水力之設計如実例　シビル社
山口昇　応用力学ポケットブック　鉄道時報局
坂井利之
電子計算機　岩波書店
矢野義男
砂防施工法　山海堂
小松定夫
薄肉構造物の理論と計算1　同
復興局橋梁設計計算集1　シビル社
鈴木雅次
港湾工学（高等土木14）　常磐書房
木幡長命
河川工作物　丸善
鶴見一之
下水道　同
隠塚康公
そんづか曲線表と設計資料　同
米谷栄二
新版測量学　一般編　同
上野正夫
鋼並鉄筋コンクリート不静定橋　淀屋書店
平井喜久松
鉄道工学（高等土木10）　常磐書房
土質工学会編
建設工事における土質工学の実用例　土質工学会
川井一　最新実用高等数学　パーワ社
谷藤正三
道路舗装施工法　山海堂
鷹部屋福平
構造力学特論　誠文堂
近藤康夫
鉄筋コンクリートの設計　オーム社
坂元左馬太
図解計算鉄筋コンクリート設計及施工　鉄道図書局
日本機械学会編
機械実用便覧　日本機械学会
小野諒兄
鉄道線路の構造及び強度　アルス
乏池栄太郎
機械掘削工事施工之基　同
高橋三郎
発電水力　岩波書店
米澤政治
電気鉄道　同
W.F.エイムズ
工学における非線形偏微分方程式 1.上　産業図書
西田正孝
応力集中　森北出版
セレンセン．コガエフ
機械要素強度計算便覧　同
和久井孝太郎
電子回路のCAD　日刊工業新聞社
Donald A Calahan
コンピュータによる電子回路設計　同
Ray W Clough
構造物の動的解析　科学技術出版社
環境測量士のための騒音　振動測定技術　山海堂
騒音　振動　白亜書房
土木学会
土木工学における数値解析　基礎編　サイエンス社
基準点測量作業規程　日本測量協会
持田哲夫
骨組の解析　鹿島出版会
谷本勉之助
演算子法構造解析　森北出版
信原信夫
骨組構造解析入門　伝達マトリックス法　培風館
栖原二郎
マトリックス算法概説　マトリックス法振動および応答　同
成岡昌夫
骨組構造解析　計算技術および数値計算法　同
鷲津久一郎
弾性学の変分原理概論　有限要素法と破壊力学　同
河島佑男
動的応答解析　熱伝導と熱応力　同
栖原二郎
平板の曲げ理論　マトリックス構造解析の誤差論　同
川股重也
シェル構造解析　座屈問題解析　同
川井忠彦
薄板構造解析　建築構造物の自動設計と最適設計　同
江守忠哉
標準活用マニュアル　日本規格協会
副島一之
ハンディブック電気　オーム社
大和久重雄
機械用鉄鋼材料　産業図書
塩崎義弘
特殊溶接入門　コロナ社
やさしい溶接部の試験と検査　産報出版
大西清　ＪＩＳによる機械製作図の読み方．描き方　オーム社
塩崎義弘
アークガス溶接の基礎とその標準作業　コロナ社
日本機械学会講演論文集　No.780～12～17　日本機械学会
公害防止設備機材事典　産業調査会
カール．イムホフ
下水道ハンドブック最新下水処理装置機器集覧　環境技術研究会
コンクリートライブラリー
30　プーブコーン工法設計施工指針（案）　土木学会
31　ＯＳＰＡ工法設計施工指針（案）　同
32　ＯＢＣ　同　同
33　ＶＳＬ　同　同
35　アルミナセメントコンクリートに関するシンポジウム　同
36　ＳＥＥＥ工法設計指針（案）　同
39　膨張性セメント混和材を用いたコンクリートに関するシンポジウム　同
41　鉄筋コンクリート設計法の最近の動向　同
42　海洋コンクリート構造物設計施工法指針（案）　同
43　太径鉄筋Ｄ51を用いる鉄筋コンクリート構造物の設計指針　同
土木学会編
ダムの地質調査　同
地下構造物の設計と施工　同
ダム基礎グラウチングの施工指針　同
プレビーム合成げた道路橋標準設計集　昭和51年4月　プレビーム振興会
同　橋設計施工指針　同
エンジニアリング．サイエンス講座Ｂ
1　流れと熱の工学　共立出版
26　土の工学　同
36　工業デザイン　同
精密基準点測量　昭和49年版　日本測量協会
橋 Bridges in Japan 1972　土木学会
土木学会編
土木学会誌論文報告集総索引 1915～1975　同
固体力学シリーズ
1　粘弾性学　培風館
2　熱弾性　同
3　構造安定の原理　同
4　構造物のクリープ　同
5　弾性平板　同
6　非線形動的弾性学　同
土木工学大系
ケーススタディダム　彰国社
土木施工法講座
16　鉄道保線施工法　山海堂

19　トンネル施工法　同
15～2 地下鉄道施工法　同
技術シリーズ
2　熱伝達特論　養賢堂
機械工学基礎シリーズ
6　移動論　朝倉書店
わかり易い土木講座
3　測量(Ⅱ)応用　彰国社
電子回路基礎講座
3　トランジスタ回路(Ⅱ)　オーム社
実験物理学講座
7　エレクトロニクス　共立出版
NHKブックス
318　法隆寺を支えた木　日本放送出版協会☆
朝倉土木工学講座
23　岩盤力学　朝倉書店
土木工学大成
7　土質力学特論　森北出版
最新土木工学シリーズ
1　最新構造力学　同
理工学基礎講座
17　移動論　朝倉書店
基礎工業数学講座
1　代数学および幾何学　同☆
2　微分積分学　同☆
3　工業統計学　同☆
4　工業応用数学　同☆
5　計算法　同☆
7　応用常微分方程式　同☆
8　応用偏微分方程式　同☆
9　応用力学　同☆
10　計算機　同☆
わかり易い電気講座
電気電子材料　明現社☆
種田守　写真測量　オーム社
Zelleres
Durchlaufterager Eintlnien
Momentenlinien Schnittgroben
Veriag Von
D. M. R. Tapin
Aduances in Research on the
Strength and Fracture of
Mathrials vol 1～2A 2B 3A～3B
4　Pergamon
CR－1064 (E3) Elastic－Plastic
Large Deformation Response of
Clay to Footing Loads　クリアコム
Earthquake Resistant Design for
Ciuil Engineerng Structures
Earth Structures and Foundations
in Japan　土木学会
海外技術情報シリーズ
Soil－Structure Interaction
dueto Earthquake Loading
サンケン技術貿易
John C. Keegel
The Language of Computer
Programming in English　Regents
Standard Methods for the
Examination of Water and
Wastemater　Apha－Amwa Wpcf
Eiserne Balkenbrücken
Walter De Gruyter

産　業

玉城哲　稲作文化と日本人　現代評論社
NHKブックス
海を渡った開拓農民　日本放送出版協会☆
駒村富士弥
治山砂防工学　森北出版
千葉徳爾
はげ山の文化　学生社☆
土木工学大系
13　景観論　彰国社
NHKブックス
316　需要の時代　日本放送出版協会☆
Eugene J. Hall
The Language of Tourism
in English　Regents
Boudewign Mohr
The Language of International
Trade in English　同
Maryorie Ziegler
Tokyo Restaurant Guide　英友社

芸　術

中野八十二
図説剣道事典　講談社
近世日本相撲史3　ベースボールマガジン社
ゴルフルール判例集　報知新聞社
福田雅之助
図説テニス事典　講談社☆
A.V.ミッチェル
キャンプ.カウンセリング
ベースボールマガジン社
佐藤友久
スポーツの基礎的トレーニング
大修館書店
新修日本絵巻物全集
20　善信聖人絵　琴引絵　角川書店☆
27　天狗草紙　是害房絵　同☆
日本絵巻大成
12　男衾三郎絵詞　伊勢新名所絵歌合
中央公論社
17　華厳宗祖師絵伝　華厳縁起　同
18　石山寺縁起　同
19　紫式部日記絵詞　同
大和古寺大観
5　秋篠寺　法華寺　海龍王寺　不退寺
岩波書店
新修絵巻大成
21　東征伝絵巻　角川書店
中国書論大系
1　漢魏　晉南北朝　二玄社

語　学

藤堂明保編
学研漢和大字典　学習研究社
金田一春彦編
学研国語大辞典　同
今井邦彦 他
現代の英文法5　文Ⅱ　研究社
電子計算機による英語教科書の使用語彙総
覧　中学校編　漢水社
用字便覧　小桜書房
曽我松男
英文基礎日本語　大修館
新英和大辞典　研究社
綱町達也
漢文読解辞典　角川書店
中沢希男
漢字漢語概説　教育出版
新和英大辞典　研究社
オックス.フォード現代英英辞典　開拓社
井上和子
日英対照日本語の文法規則　大修館書店
渡辺登士
続英語語法大事典　同
福田恒存
なぜ日本語を破壊するか　英潮社
鈴木孝夫
ことばと社会　中央公論社☆
閉ざされた言語　日本語の世界　同☆
林四郎　文章表現法講説　学燈社☆
川澄哲夫編
英語教育論争史　(資料日本英学史2)
大修館書房
新釈漢文大系
65　文心雕龍　明治書院☆
95　貞観政要　同☆
岩波講座日本語
2　言語生活　岩波書店
11　方言　同
12　日本語研究の周辺　同
坂倉篤義
改稿日本文法の話　教育出版☆
Longman Dictionarg of
Contemporarg English　Longman
A First Course in Technical English
Students Book 1　H.E.B.
Wörterbuch der deutschen
Gegenwaress Prache 1～6
Akademie Varlag Berlin
Rogets International Thesaurus
Crowell
Edward De Bono
Wordpower　Harpen

文　学

P.スタンスキイ
作家以前のオーウェル　中央大学出版部
山形和美
G.グリーン　冬樹社
中橋一夫
現代英文法ノート　南雲堂
F.R.リーヴィス
現代詩と革新　同
合本俳句歳時記　角川書店☆
綱淵謙錠
戊辰落日　上・下　文芸春秋☆
日本文芸家協会編
文学 1978　講談社☆
木俣修　随筆集　途上の虹　求龍堂☆
飯田茂子
同　山橋　日本随筆家協会☆
野上弥生子
同　花　新潮社☆
高城修三
樹の木祭　同☆
上林暁全集　11～13　筑摩書房☆

助川徳是
　文学と史蹟の旅路　九州　沖縄　学燈社※
高野平　寛平后宮歌合に関する研究　風間書房
横井博　印象主義の文芸　笠間書院
鈴木重次
　中国古代文学論　角川書店
飛鳥井雅道
　鷗外その青春　同
串田孫一
　自然の断章　講談社✣
中村光夫
　日本の近代　文芸春秋✣
豊田穣　燃える怒濤　三笠書房✣
外山滋比古
　省略の文学　中央公論社✣
E.A.アボット
　二次元の世界　講談社✣
津島美知子
　回想の太宰治　人文書院✣
松本幸子
　関谷の日日　新人物往来社✣
吉川弘次郎
　中国詩史　下　筑摩書房
林勇　島崎藤村　過渡の小説義塾　冬至書房新社
風巻景次郎全集
　1　日本文学史の方法　桜楓社✣
　2　文学史の構想　同　✣
　3　古代文学の発生　同　✣
　4　源氏物語の成立　同　✣
　5　和歌の伝統　同　✣
　6　新古今時代　同　✣
　7　中世和歌の世界　同　※
　8　中世圏の世界　同　※
　9　批評と随想　同　✣
　10　戦後日記　書簡　同　✣
　風巻景次郎人と学問　同　✣
日本近代文学大事典
　1　人名（あ～け）　講談社
　2　同　（こ～な）　同
　3　同　（に～わ）　同
　4　事項　同
　5　新聞　雑誌　同
　6　索引　その他　同
世界の文学
　1　ジョイスズヴェーヴォ　集英社※
　2　カフカ　同　✣
　28　カルペンティエールマルケス　同　✣
　32　ソルジェニーツィン　同　✣
NHKブックス
　311　梁塵秘抄　日本放送出版協会✣
　313　万葉開眼　上　同　✣
　315　同　下　同　✣
鑑賞日本古典文学
　別巻　日本文学史入門　角川書店✣
中国詩文選
　23　明代詩文　筑摩書房
中国の名詩鑑賞
　1　詩経　明治書院✣
　4　初唐　同　✣
明治文学全集
　24　内田魯庵集　筑摩書房✣
筑摩世界文学大系
　1　古代オリエント集　同　※
ゴーゴリ全集
　5　死せる魂　第一部　河出書房※
　6　同　第二部　同　※
近代文学評論大系
　1　明治期Ⅰ　角川書店※
　2　同　Ⅱ　同　✣
　5　大正期Ⅱ　同　※
　6　同　Ⅲ　昭和期Ⅰ　同　✣
　7　昭和期Ⅱ　同　✣
　8　詩論　歌論　俳論　同　✣
　9　演劇論　同　※
　10　近代文学評論年表　同　✣
永井路子
　悪霊列伝　毎日新聞社
日本の仏画
　6　釈迦霊鷲山説法図　学習研究社
　9　十一面観音像　同
　10　国宝両界曼荼羅図　同
Charles Dickens
　Bleak House　Oxford
同　Nicholas Nickleby　同
同　Martin Chuzzlewit　同
同　American Notes and Pictures From Italy　同
Peter Opie
　The Classic Fairy Tales　同
　Biographical Dictionary of JaPanese Literature　講談社✣